



【ものづくり 人づくり 地域づくり】

みんなの力をあわせて 40年

10/30「協同・感謝のつどい」(3)

常総市、石巻、福島からのメッセージ

大丈夫だよ、
仲間だからね！「今日は生協のみなさんに感謝
の気持ちを伝えたくて来ました」常総市組合員
染谷みどりさん

みなさんこんにちは。常総市から来ました染谷です。本当に今回「常総生協に入っていてよかったな」と思いました。

今まで常総生協が福島や東北の支援をやってきて組合員として情報を見たり聞いていました。お友達にも東北や海外の支援をしている方がいて「たいへんなんだよ、実際の被災地に行ってください！」と言われて、私も生協のみなさんといっしょにあいこ浦福島にも行かせてもらったりしてきました。

それが思いもよらず自分が被災者になりました。私も避難生活というものはじめて体験しました。こんなに眠れないものかということを知りました。

家は水が3日間浸かって、眠れない状態でした。表はにこにこしていても、実際心の中はもうたいへんで、毎日眠れないんです。

東北の津波を見たときには「ああ大変だなあ、何にもなくなってしまう」と人ごとのように眺めていたのですが、実際自



分のところに水が来てしまったとき、水の勢いがすごくてどうしようも逃げられない。私はヘリコプターが飛び交う中、救命ボートで助けて頂きましたが、避難所にたどり着いた時はホッとしたのもつかの間「さて、どうしよう」。愕然としました。

避難所から自宅を見に行くのが3日ほど続きました。何している訳ではないのですが、毎日長靴を履いて泥だらけ。1回で済むことが3回も4回も。「ああどうしよう」だけなんです。15日の日、水が引いた時、生協のみなさんが来てくださったんです。ほんとうにうれしかったです。「大丈夫だよ」って言ってくれたと思うんです。

そしてその時の温かいおにぎり……。

ウチの町内の半分は被災していましたが炊き出しはありませんでした。町内会も、市全体が動いていませんでした。そこに温かいおにぎりをいっぱい持ってきてくれたんです。ほんとにジーンとしました。



避難所からは菓子パンもらってます。おにぎりもあります。でも温かいおにぎりや味噌汁はなかったんです。生協のみなさんが近所の人に声をかけてくれました。みんなで頂きました。近隣の方がほんとうに喜んでくれました。ほんとうに私ひとりじゃなく、生協に入っていない方もいっしょに頂きました。

生協のみなさんが炊き出しを2ヶ月近くしてくれました。生協のみなさんの負担も考えました。でも「今まで東北も福島もやってきたから大丈夫だよ。組合員も生産者も、仲間の団体もみんなで応援してくれるよ」と言ってくれたこと本当に私はうれしかったです。

ところが、被災地ではだんだんみなさん「もらうの当たり前」という意識が出てきたんです。そこで私これではいけないと思い提案させて頂いたんです。

「東北・福島では被災して私たちよりもっとたいへんな人たちがいるんですよ。共に何かできないだろうか。被災地東北のサンマとかの食材をつかってつながってゆこうよ」と。無料で提供ではなく、一回150円を負担して頂こうと提案しました。でも少し心配でした。みんな来てくれるだろうか？

はじめは200匹。それも丸々太ってたんです。それを生協のみなさんが現場で焼いてくれて。おいしかったです。そして「貰うばかりじゃなく買うよ」って常総市民がお金を出して買いに来てくれたんです。気持ちが通じた！って。



あと、鈴木牧場さんのヨーグルト、おいしかったです。チーズも頂いたんで、生協に入っていない方に渡しました。おいしかった！って。うれしかったです。



私が知らないたくさんの方が支援をしてくれたこと、ニューズレターを見たとき組合員の方々が、本当にみんなで支援してくれているんだということがわかりました。

本当は今日は生協に入っていない方もお連れしたかったんですが、生協の40周年ということで私が代表してこの「感謝のつどい」、私が感謝したいという気持ちで取り急ぎ来させて頂きました。

役所も出てこない、自分自身がみなさんてんてこ舞いの状態の中で、どろ掻きから家財道具や泥のついた食器の片付けまで見えないところで助けて頂き、そして炊き出しを続けて下さり、本当にありがとうございました。お礼の言葉とさせて頂きます。40周年おめでとうございます。

生協があったからこそ、町会も常総市も頑張れるということがわかりましたので、これからみなさんと共に、自分たちだけ良ければよいのではなく、みんなで手をにぎって頑張ってゆきたいと思えます・・・エイエイオーをしたいと思えます。

「エイ！エイ！オー！」。



(石巻) 高橋徳治商店 高橋英雄さん

(震災後のスライドの説明ののち)



あらためまして、高橋英雄です。こんな席に招いて頂いてありがとうございます。

今まで40周年、いろんな方が関わられて、ここまで来たんだな、すごいなと。私たちは歴史としては111年目に入ったのですが、無添加の冷凍食品を作って40年、同じような40年。みんなそれぞれが思いがいっぱいありながら、その時々に応じて生協を、生きているものとして作られてきた。すごいなと。

先ほど「常総生協は変な生協です」と申し上げました。なぜ支援に来るんですか？本当に大石さんは、あるいは職員さんも、何で来るんですか？と。ダンプカー2台まで連れてきてユンボまで持ってきて、なぜ来るんですか？と。

私は、この生協が持っている思い、めざすもの、やってきたことを宝として、遺伝子として綿々とないでいって頂きたい。

私は会社を再興するとき、うちのかあちゃんに、「会社閉じたら」と言われました。なぜ会社を再開するのか、何のためにやるのか考え続けました。「なぜ生きるのか」まで考えました。二回死のうと思いました。死んだ方が楽だから。なぜ生きるんだ。なぜ生きているんだ。なぜ会社再開するんだ。

ヘドロがついた父、母の遺影に、何回もチーンと鳴らしました。「お前が選べ、」と、そのつど遺影が語ってくれました。

私も会社も、この被災地で、この世の中で本当に必要とされる存在になると。本当に必要なら、何

が必要とされるのか、そんなことをちょっとだけ気づきました。

「心ある」という言葉があります。「心ない」という言葉もあります。被災地では震災から半年してから「今だけ、これだけ、我だけ」「今だけ、オレだけ、オマエだけ」と、こういう風潮があふれました。おカネで買えないものいっぱいあったはずなのに「もうそんなこと言ったって」と。「今日明日のメシだ」という一言で、それは被災した方々の心の中からも消えてゆくのです。

本当にそうなんだろうか？

生協の組合員が「とうふ揚げ」待っていてくれるだけで、スタッフが少しずつ少しずつ笑顔が増えていく。組合員からの思いの力です。

常総生協は「身の丈」を知らない生協です。しかし「思いの丈」がある。やめようしない。それに私が考えました造語ですが「心の丈」というのもぜひ入れたい。

ここにあいコープ福島の理事長さんいらしています。震災の年の6月、生産者としておじゃましました。私自身もボロボロでした。72名の総代さんを前にして生産者のあいさつ。しかし壇上に立ったら、「助けて～！高橋さん何か言って」というふうに私は聞こえました。「元気下さい」と聞こえました。はじめて涙が出ました。何もしゃべれなくなりました。最後に言えたのは「仲間だからね」「仲間だよ」って。

ぜひ、生産者のみなさんも「仲間として」この生協とどういっしょに生きるか。私は震災後はず～と、どう生きるのか考え続けました。死ぬまで考えなければ死ぬに死ねない。

この生協、組合員あるいは組合員でない人にとっても必要な生協となるために、新たな40年の出発の日、みなさんと共に、本当にいい仲間になりましょう。それを今日はお話しさせていただきました。ありがとうございます。がんばりましょう。



(福島) あいコープ福島

佐藤孝之理事長さん



40周年本当におめでとうございます。この40年間多くの組合員のみなさん、役員のみなさんが自分で全力疾走して次の人にたすきを渡すという駅伝のように心と気持ちを込めて走り続け渡り続けてきたその歴史がこの40年かなと、先ほど来のお話を聞いて思いました。おめでとうと言うより、本当にありがとうございますという気持ちで私は思っています。

と言いますのは、3.11のあとたくさんの方から支援を頂きました。その中のひとつとして常総生協さんから大きな力を頂きました。

いちばん転機になったのは二つありまして、ひとつは爆発直後に福島のお母さんたちの母乳検査をご支援ご協力頂きました。21名の検査を行った中で、4名の母乳からセシウムが検出されました。この母乳について赤ちゃんに飲ませ続けるかどうかという真剣な議論がありました。その時の結論は、お母さんから「子どもに飲ませよう。なぜなら母乳の持つ免疫力の方を優先させよう」ということになりました。最初聞いた時は、ええと思いました。でも免疫力を優先させるという考え方、そしてお母さんから一日でも早くセシウムを排泄させるためにアップルペクチンとか、西の方の野菜を与えよう。そして約1ヶ月後に再検査をして、セシウムは母乳からは発見されなくなりました。その1ヶ月の体験と討論を通じて、この福島でも、真っ暗闇の中でも何とか免疫力のアップと排泄を促進させることで生きていけるんじゃないかという大きな転機となったのが常総生協さんの支援でした。

もうひとつは当時、心の問題として非常に不安を抱えていました。その時に、綿を、福島で頑張ろうとするお母さんたちの幼な子に、ふわふわという柔らかい和綿の布団で元気を出してもらおうと、20組の綿の布団を贈られました。これはお母さんたちに大きな激励となりました。あれから5年になりますが、この地に残ってがんばり続けられたひとつの転機を与えてくれたという意味では、本当にいくら感謝し

ても感謝しきれないと考えております。

先般、こちらの水害のお見舞いに来させていただきました。その中で常総さんの組合員さんとお話ことができました。ところが「いやぁ私たちはこの程度で、福島の方がもっと大変でしょう。福島がんばって下さい」と逆に激励を頂きました。そういう意味では、すでに常総生協の組合員さんは自分たちの大変さをかかえながらも、ほかの生協、もしくはこの社会に心を寄せる生協だという、その縮図を見た思いで、こうしたことがこの40年の中で培われてきているなど感じました。支援に来て、逆に元気をもらいました。

この間の常総のニュースの中に、「水害の最初の問題は水でした。次はゴミでした。そして今は心です」という話しが書いてありました。ある意味、私たちもそれは共通しています。今、心という問題が、非常に大きな問題として被災地にあります。

うちの組合員の中でも、そういう心の病の中で、家族も含めて病院に通うようになって、なかなか元気になれない、避難から戻ってきてもそういう状態が続く。生協の交流会でいちど元気になった人がまた元にもどっちゃう。そういう意味では、表面には現れていませんが、心の問題をいかに継続的にケアしてゆけるか生協でもたいへん大きな課題です。また仮設の人も依然として仮設生活を続けています。私たちはこの間、百戸の仮設住宅の浪江からの仲間に月1回の支援行動をおこなってきました。4年間続けてまいりました。

でも、あいコープがもう少し大きかったら、今の10倍だったら千人できたよね、1万人組合員がいたらもっとも浪江の人たちに支援ができたよねと、今すごく反省をしています。

来年あいコープは30周年です。「未来につなぐ30周年」運動ということではじまっています。やっぱりあいコープっていう組織を大きくしなければどうしようもない。こういう社会を問題にする運動、そういう生協の立場からすると常総生協さんと非常に共通するものがあって、社会的影響を与えられる、地域の仲間と本当に連携をとることができる、いろいろな生産者と連携とらなければならないとすれば、もっと力がなければいけない。これが最大の課題だと、私たちはなっています。

常総生協さんの40周年に学んで、私たちも30周年を成功させるという決意を述べましてお祝いの挨拶にさせていただきます。ありがとうございます。